

蘇軾の詞に見られるヤナギについて^①

二五六

保 莉 佳 昭

一 はじめに

中國の詞詩において、古來ヤナギは春景色、別れの場面、女性の姿態等を描く際によく使われてきた^②。特に心象風景が多用される詞では、缺くことのできない題材の一つであり、作品中で、どのように描かれているかを探るのは、興味深いテーマである。北宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一年）は詞に新境地を拓いたことで有名であるが、彼の詞にも、やはり、古來詠み継がれてきたヤナギが多く描かれている^③。そこで、小稿では、蘇軾の詞に見られるヤナギを取り上げ、その特徴を考察してみる。ただ、紙幅の関係もあり、すべてに觸れることはできないため、彼の人生と繋がり強い詞、また、従前の用法とは異なる用例を特に取り上げて考察してみる。なお、テキストは『蘇軾全集校注』「詞集」（河北人民出版社、二〇一〇年）と『蘇軾詞編年校注』（上海古籍出版社、二〇〇二年）を用い、その他は、その都度、適宜、注に示すことにする。また、一つの作品で、前後段に分かれる場合は「／」を付けて示した。

二 自己を投影したヤナギ

蘇軾のヤナギの詞と言えば、眞つ先に挙げられるのが、柳絮を描いた傑作「水龍吟」詞であろう。小稿では、まず、この作品から見てみる。

「水龍吟」

似花還似非花、也無人惜從教墜。拋家傍路、思量却是、無情有思。縈損柔腸、困酣嬌眼、欲開還閉。夢隨風萬里、尋郎去處、又還被、鶯呼起。不恨此花飛盡、恨西園、落紅難綴。曉來雨過、遺蹤何在、一池萍碎。春色三分、二分塵土、一分流水。細看來、不是楊花點點、是離人淚。

【大意】（柳絮は）花のようで、また花ではないようである。散り落ちるのを惜しむ人もいない。家を離れて道に打ち捨てられ、考えれば、かえって無情でありながら思いを持っている。（ヤナギの頼らかな枝は）愁いにねじ曲がり傷ついた腸、（緑の葉は）氣だるく、開こうとしながら閉じたままの豔やかな目。夢の中で風に乗って一萬里。あなたの行方を尋ねようとしても、かえって、ウグイスに呼び起される。／この花が散り盡くすのを恨まないが、西の園に散る赤い花びらを枝につなぎ止められないのが恨めしい。朝の雨が降り過ぎ、（柳絮の飛び去った）跡がどこかで見れば、池じゅうの碎けた浮草となっている。春景色（の柳絮）は三分して、二分は土くれとなり、一分は川の流れに消える。（それは）よくよく見てみれば、ヤナギの花ではなく、別れを悲しむ人の一粒一粒の涙である。

本詞には、「章藻（一〇二七―一一〇二、質夫は字）の柳絮の詞に次韻して（次韻章質夫楊花詞）」という序が付いており、制作時期は元豐四年（一〇八一年）、制作地は黃州（湖北省黃岡）である^④。この時、蘇軾は詩で

朝政を誹謗した罪により流罪となり、元豐三年二月から、流刑の地である黃州に身を置いていた。

さて、本詞に關しては、蘇軾が章燾に寄せた手紙の中に「(貴殿の)ヤナギの詞は絶品です。…もとより唱和するつもりでしたが、貴殿がちょうど柳絮の飛ぶ時に巡按(管轄地域を巡回し役人の仕事ぶりや庶民の生活状況等を調べること)に出て、四人の子供が門を閉ざして悲しんでいるのを想像しているのを慮り、そこで、(貴殿の) 思いを綴って、(貴殿の贈ってくれたヤナギの詞に) 次韻した詞一首を作つて届けます。なお、(私の詞を) 人には見せないで下さい」という記述がある。本詞は、惜しむ人も無く散り行く柳絮を眺めつつ、戀人と別れた寂しい我が身を思う女性を描いているが、そこには、單身赴任した父親を思う四人の子供の氣持が詠まれている。もちろん、そればかりではない。蘇軾の心情も暗に込められている。しかし、「蘇軾は寓意を明確にすることに差し障りがあった。それは柳絮を借りて自己の官界での浮き沈みと時事に對する悄然たる思いを述べているからである」^⑦。だから、誰かに讀まれると、その寓意が知れてしまい、また、物議を醸すのを恐れて、章燾に寄せた手紙にも「人には見せないで下さい」と口止めをしているのである。浮き沈みの多い官界で生きる自分。行き先分からず漂う柳絮は、蘇軾の目に、自身の姿そのままに映つたのであろう。黃州流罪にあつて、誰も手を差し伸べてくれない。自分はあたかも道に打ち捨てられた柳絮のよう。都を夢に見ようにも、辿り着く前に眠りから起こされる。自分が流罪になつたこととは恨まないが、蘇轍が連座したことは辛くてたまらない。結局自分は、土となり、川に流れて消えることになろう。これを思うと涙がぼたぼたと落ちる。

讀み過ぎの所があるかもしれないが、この「水龍吟」詞には、柳絮に黃州左遷の憂き目を見た自身を重ね合わせていると見ていいであらう。

蘇軾の詞に見られるヤナギについて

蘇軾には、他にこの詞と似た手法で書かれた作品がある。それは、熙寧十年(一〇七七年)三月、開封(河南省)の郊外で作られた「洞仙歌」詞である。

「洞仙歌」

江南臘盡、早梅花開後。分付新春與垂柳。細腰肢、自有入格風流、仍更是、骨體清英雅秀。／永豐坊那畔、盡日無人、惟見金絲弄晴晝。斷腸是、飛絮時、綠葉成陰、無個事、一成消瘦。又莫是、東風逐君來、便吹散眉間、一點春皺。

【大意】江南で舊年が終わわり、早咲きの梅が花を開いた後。新春は枝垂れヤナギに交代した(新春の中心はヤナギに代わった)。女性の細い腰、自ら高い品格を有している。更に體つきも清く優雅である。／永豐坊の邊り、一日中人も無く、ヤナギはただ黄金の枝を晴れた晝に揺らすばかり。非常に悲しいのは、柳絮が飛ぶ時、緑の葉が茂つて影を作り、何事も無く、少しずつ衰えてしまうこと。ただきつと、東風が君の後を追つて来て、眉間の春の皺を吹いて愁いを消してくれるに違いない。

本詞は、王誥(一〇四八―一〇四年)と開封の郊外にある四照亭で會つた際、王誥の愛らしい侍女に詞をねだられて作つたものである。⑧。内容は、當然、彼女のことを詠んでいるが、この詞が作られた時の蘇軾が置かれていた状況と、本詞の後半の詠いぶりとを重ねると、やはり、含意があると見るべきであらう。

彼は二月下旬、陳橋驛(河南省封丘)まで来た時、徐州(江蘇省)知事の辭令が下りたが、都の開封に入ろうしたところ認められず、城外の范鎮(一〇〇七―一〇八八年)の東園に寓居した。⑨。筆者はこの時、蘇軾の身に筆禍事件が起こっていたと推測するが、彼とすれば、開封への入城を

許されないのは、不本意窮まり無い。であれば、この時、自分を信用してもらえない、理解してもらえない不満と不安の思いを抱いたに違いない。そのような状況を踏まえて、本詞を讀んでみれば、後半の「一日中人も無く、ヤナギはただ黄金の枝を晴れた晝に揺らすばかり。非常に悲しいのは、柳絮が飛ぶ時、緑の葉が茂って影を作り、何事も無く、少しづつ衰えてしまうこと」は、自らの姿をヤナギを借りて綴っていると理解して無理はない。そして、「ただきつと、東風が君の後を追って来て、眉間の惜春の皺を吹いて愁いを消してくれるに違いない」は、自分を救ってくれる人物の到来を期待する気持ちの表れである。蘇軾は熙寧十年三月、都に入れてもらえなかった時、理解者のいない自己をヤナギに投影して詠じたのである。これは、先に見た「水龍吟」詞と重なるであろう。もう一首、ヤナギに自分を投影した例を見てみる。

「蝶戀花」

花褪殘紅青杏小。燕子飛時、綠水人家繞。枝上柳綿吹又少。天涯何處無芳草。／牆裏鞦韆牆外道。牆外行人、牆裏佳人笑。笑漸不聞聲漸悄。多情却被無情惱。

【大意】赤い花はしほみ、青い杏は小さい。ツバメが飛ぶ時、緑の水が人家を巡って流れる。枝の柳絮は風に吹かれて数少なくなった。世の果ては、どこも芳しい草が生えている。／垣根の中のブランコ、垣根の外は、道。垣根の外の旅人、垣根の中の美女。笑い聲は段々と聞こえなくなり、聲は徐々に静かになる。多情の人は無情な人に心をかき亂される。

本詞は、紹聖元年（一〇九四年）閏四月、定州（河北省）知事を罷免され英州（廣東省）知事に移る命を受けた直後に作られたものである。^⑫前年の元祐八年、太皇太后の高氏が亡くなり、哲宗の親政が始まった。周知

の通り、氣鋭の哲宗は新法を採用し、舊法を廢した。これに因り、多くの舊法黨の人士は朝廷を追われ、蘇軾も端明殿學士兼翰林侍讀學士の肩書剝奪、英州知事に降格、繼いで建昌軍司馬惠州安置に處せられた。副首相を務めていた弟の蘇轍も汝州（河南省臨汝）知事に出された。

本詞は、これらの状況を詠み込む。「枝の柳絮は風に吹かれて数少なくなった」とは、朝廷に舊法黨の人士達が殆どなくなってしまったことを言う。蘇軾自身も、柳絮のように、風で飛ばされてしまった。そして、それに續く「世の果ては、どこも芳しい草が生えている」は、都から遠く離れた地には左遷された有能な舊法黨の人士が多くいることを表現する。^⑬後半の「垣根の中」は、新法黨の「無情」な連中が住む中央政界を意味しよう。このような含意があるからこそ、朝雲は毎日歌い、その悔しさに涙を流したのである。^⑭遠く英州の地に追放される蘇軾には、中央政界の「笑い聲は段々と聞こえなくなり、聲は徐々に静かになる」。冒頭の「赤い花はしほみ、青い杏は小さい」は、太皇太后高氏の死と、若い哲宗を表しているかもしれない。

三 黃州とヤナギ

さて、ここで冒頭の「水龍吟」詞に戻ってみる。この詞は黃州で作られたものであるが、黃州での生活とヤナギの結び付きについて、少々こだわってみたい。周知のとおり、蘇軾は黃州貶謫の時期、雪堂を建てて心の據り所とした。この雪堂に、蘇軾はヤナギを植えて愛でた。雪堂のヤナギである。

この雪堂のヤナギについては、元豐五年（一〇八〇年）九月に作られた「醉蓬萊」詞、元豐七年四月一日に作られた「滿庭芳」詞に詠まれている。

「醉蓬萊」

笑勞生一夢、羈旅三年、又還重九。華髮蕭蕭、對荒園搔首。頼有多情、好飲無事、似古人賢守。歲歲登高、年年落帽、物華依舊。／此會應須爛醉、仍把紫菊紅萸、細看重嗅。搖落霜風、有手栽雙柳。來歲今朝、爲我西顧、酌羽觴江口。會與州人、飲公遺愛、一江醇酎。

【大意】夢のような苦勞多き人生などお笑いだ。故郷を離れて暮らした三年間、また（今年も）重陽を迎える。白髪は短く、荒れた庭に向かい頭を搔く。幸運にも、情けに篤く、酒好きで事も無げに民衆を治め、古代の有能な知事のような方（徐君猷）がいた。毎年高地に登り、酒宴を催すが、自然の景物は毎年變わらない。／今日のこの會では痛飲し、紫の菊と赤いカワハジカミをよく見て繰り返し匂いを嗅がなければならぬ。自分で植えた二本のヤナギは、霜を含む風に揺れる。來年のこの日の朝、私を思って西を眺め、杯を持ち河口に浮かべてほしい。私は必ず黃州の人々と、あなたの遺愛が籠った川一杯の酒を飲みますから。

本詞には「私は黃州に流されて、三度重陽を迎えたが、毎年知事の徐大受（生卒年未詳、君猷は字）と棲霞樓で會った。今年、貴殿はこの地を去り湖南の州知事に轉動したいという希望を出した。このことを思うと失意の餘り呆然としてしまった。そこでこの詞を作った（余謫居黃州三見重九、每歲與太守徐君猷會棲霞樓。今年公將去、乞郡湖南。念此惘然。故作是詞）」という序が付けられている。今まで蘇軾に暖かい手を常に差し伸べてくれた黃州知事の徐君猷が轉任願いを出した。それを知った蘇軾はショックを受けたに違いない。元豐三年二月から辛い流人の生活が始まったが、當地には情に篤い知事の徐君猷がいてくれ、毎年、酒宴を招いてくれた。それが心の救い、支えであった。ところが、彼は轉勤を希望しているという。「貴殿との重陽の酒宴も今日が最後になる。ならば、

存分に酒を飲み、紫の菊と赤いカワハジカミを目に焼き付け、香りを何度も嗅ぎ、今日この時を心に刻み、決して忘れないようにしよう」。これに續き、詞は「自分で植えた二本のヤナギは、霜を含む風に揺れる」というヤナギの描寫に移る。これは、徐大受が當地を去り一人取り残された蘇軾の姿を現したものでないか。二本のヤナギに自分の姿を投影させたのである。詞は、最後に來年の重陽を想像して結ばれる。

蘇軾がヤナギを自ら植えたことは、元豐六年の年末に作られた「徐君猷挽詞」に言及がある。今、當該部分の二句を示せば「雪が止んだ後に一人でヤナギを植えに來た時、竹林の間を歩き來して茶を摘んだ時（雪後獨來栽柳處、竹間行復采茶時）」とあり、ヤナギが黃州での忘れがたい記念であったことが知れる。

このヤナギを蘇軾が大切に思っていたことは、黃州を離れる際に作った「滿庭芳」詞から、より強く読み取れる。

「滿庭芳」

歸去來兮、吾歸何處、萬里家在岷峨。百年強半、來日苦無多。坐見黃州再閏、兒童盡、楚語吳歌。山中友、鷄豚社酒、相勸老東坡。／云何。當此去、人生底事、來往如梭。待閑看、秋風洛水清波。好在堂前細柳、應念我、莫翦柔柯。仍傳語、江南父老、時與曬漁蓑。

【大意】故郷に歸ろう、さて、私はどこに歸るのか。一萬里離れた我が家は岷峨にある。人生百年、その半分以上が過ぎ、残りの日々はもう多くはない。何もせず、黃州で二度目の閏年を迎え、子供はみな楚の言葉で話し吳の歌を歌うようになった。山村に住む友人は、ニワトリ、ブタ、祭りの酒を、老いた東坡に勧めてくれる。／（彼らは）私が去るにあたり、何と言うか。「人生は結局、左右に動く梭のように慌ただしい」と。私はゆつくりと秋風が洛水に吹いて水面に清らかなさざ波が立つのを見

る。雪堂の前の細いヤナギよ、元氣でいてくれ。(友人よ)私のことを思っ
て細い枝を切ってはならない。合わせて江南の古老に言傳する、「時には
私のために魚取りの蓑を干しておいてほしい」と。

本詞には「元豐七年四月一日、私は黃州を離れて汝州に轉勤すること
になり、雪堂の近所に住む二三人の君子に別れを告げた。その時、たま
たま李翔(生卒年未詳、仲覽は字)が江東から別れの挨拶に來たので、こ
の詞を書いて與えた(元豐七年四月一日、余將去黃移汝、留別雪堂鄰裏二三君
子。會李仲覽自江東來別、遂書以遺之)」という序が付いている。蘇軾は離
任にあたり、「自分の植えた雪堂のヤナギを可愛がって、枝を切らないで
くれ」と言い残す。黃州での日々を共に過ごした雪堂のヤナギに對する
思い入れは、半端なものではなかつたろう。だから、自分がいなくなつ
た後のヤナギが氣掛かりでしかたがないのである。詞の最後は、鄰人に
對する再會を誓つた言葉である。「將來、自分はここで本當の隱遁生活を
送るつもりだから、それまで、私が着ていた蓑を大事に取っておいてほ
しい」と語り掛けている。

さて、雪堂とヤナギと言えば、一言觸れておきたいことがある。それ
は、雪と柳絮である。作成時期は前後するが、熙寧七年(一〇七四年)四
月、杭州(江蘇省)副知事を務めていた時、潤州(江蘇省鎮江)等で起こつ
た飢饉の視察に赴いた際に作つた「少年游」詞の前半を見てみる。

「少年游」

去年相送、餘杭門外、飛雪似楊花。今年春盡、楊花似雪、猶不見還家。

【大意】去年、(私を)見送ってもらつた時、杭州の餘杭門の外には、舞う
雪が柳絮のようだった。今年、春は終わろうとしている時、柳絮が雪の
ように舞っているが、まだ(自分は)家に戻れない。

柳絮を雪で喩える例は、例えば『花間集』所收の牛嶠「江城子(極浦煙
消水鳥飛)」詞に「渡し場に舞う柳絮は、風に吹かれるままに、あたかも
狂い散る雪のよう(渡口楊花、狂雪任風吹)」とあり、詞においてはもちろ
ん目新しいものではない。しかし、「少年游」詞は、「柳絮のような雪」
と「雪のような柳絮」が共に詠み込まれ、非常に巧みな表現になつてい
る。柳絮と雪、雪と柳絮。これは、ヤナギと雪堂、雪堂とヤナギに置き
換えられるのではないか。蘇軾が雪堂のそばに何か植物を植えようとし
た時、「雪」からの連想で、「柳絮」「ヤナギ」に思い至つたと見做すの
も、あながち見當違いではないだろう。もちろん彼がもともとヤナギを
愛していたのは間違いない。ただヤナギが選ばれた理由の一つとして、
「雪のような柳絮」を飛ばす植物、という要素も多分にあつたのではない
か。蘇軾が雪と柳絮を重ね合わせたことも、雪堂にヤナギを植えた理由
の一つと考えられるのである。

四 常套手法以外のヤナギ

言うまでも無く、ヤナギは春の象徴であり、春景色に彩りを添える植
物である。それは人間で言えば若さを表す。例えば、蘇軾の詞でも、次
の作品は、その典型的なものである。

「浣溪沙」

長記鳴琴子賤堂。朱顏綠髮映垂楊。如今秋鬢數莖霜。／聚散交游如夢寐、
升沈閑事莫思量。仲卿終不忘桐鄉。

【大意】私が常に忘れずにいるのは、名役人の宓子賤ふくしぜんのこと。貴殿も彼の
ように、事も無く眉山の地を治めた。貴殿は昔、若さにあふれた顔つき
と緑の黒髪が枝垂れヤナギと映え合って美しかった。しかし今は、歳を

取り、鬢の毛に數本白髪が混じる。／交遊は會えば別れの夢のようなもの。官界の浮き沈みなど取るに足らない。貴殿は（海州にいても）故郷の眉縣を今も忘れずにいる。²⁶

本詞は、熙寧七年（一〇七四年）十一月中旬、杭州副知事から密州（山東省諸城）知事に轉任する際、海州（江蘇省）で作られたもので、「海州知事の陳氏に贈る。陳氏は以前、眉山縣の知事を務め、評判がよかつた（贈陳海州。陳嘗爲令、有聲）」という序が付いている。「眉山縣（四川省）」は蘇軾の故郷で、「陳」という人物、詳しいことは分からないが、詞の内容から見ると、二人は以前、眉山で會つていた。その時の彼の若い容貌を「若さにあふれた顔つきと緑の黒髪は枝垂れヤナギと映え合つて美しかった」と表現している。春の瑞々しい新緑のヤナギが若さを象徴し、いわゆる「常套手法で描かれたヤナギ」の用例と言える。これに對して、春のヤナギでありながら、むしろ地味な風景描寫の一つに止まつた用例がある。

「雨中花慢」

今歲花時深院、盡日東風、蕩颺茶煙。但有綠苔芳草、柳絮榆錢。聞道城西、長廊古寺、甲第名園。有國豔帶酒、天香染袂、爲我留連。／清明過了、殘紅無處、對此淚灑尊前。秋向晚、一枝何事、向我依然。高會聊追短景、清商不暇餘妍。不如留取、十分春態、付與明年。

【大意】今年の花の時季、私は奥まつた庭にいた。一日中、春風が吹き、茶を煮る煙を揺らしていた。そこにはただ緑の苔と春の草、柳絮とニレの實があるばかり（牡丹は無い）。聞くところでは、街の西側、長い回廊のある古い寺、貴族の名園に、酔つたように赤く、皇帝の衣のように黄色く、（美しい牡丹が）私のために咲き續けているようだ。／清明節が過

ぎ、散り残つた花も消え、この景色と向かい合えば酒席で涙が流れる。ところが、秋は暮れようとしているのに、なぜか一枝の花が、私に向かつて咲き續けていた。秋風は残つた豔やかな牡丹の花を許してはくれないから、酒宴を開き、この消えてしまふような美しい景色をしばらく愛でよう。ただ（牡丹の花よ）、やはり濃厚な春の美しさは、（今咲かずに）來年に回した方がいいのではないか。

本詞は、熙寧八年九月、密州で作られたものである。蘇軾はこの年の春、公務に追われ牡丹の花を見に行けなかつた。残念な思いをしていたところ、晩秋にもかかわらず、あたかも自分のために、一枝の牡丹の花が咲いていることを知つた。そこで、蘇軾はそれを見に出かけた。ただ、やはりその時、蘇軾の目には、晩秋の牡丹の花が寂しげに映つたのである。最後に「やはり、その美しさは來年の春に取つておいた方がいいよ」と牡丹の花に語り掛ける。

仕事に追われ、外出もままならず、牡丹の花が盛りの頃に、蘇軾が目にしたものは、残念なことに、庭の「緑の苔、春の草、柳絮、ニレの實」という風景だけであつた。柳絮は春の終わりを告げる風物詩であり、ここでは、蘇軾が何もしないうちに（牡丹の花を見ないうちに）、春は終つてしまつた、という意味合いで使われている。しかし、それと同時に、作品の中では「緑の苔、春の草、ニレの實」と並んで、ヤナギが「華やかさを缺く植物」として描かれているのも間違いない。確かに、牡丹と豔やかさを競えば、柳絮は到底勝てない。しかし、柳絮を「華やかさを缺く植物」に入れるのは、少し可哀そうである。ただ、この表現自体は興味深く、取り上げるべき用例と言えよう。

次に、夏の詞を二首見てみる。

「菩薩蠻」

柳庭風靜人眠晝。晝眠人靜風庭柳。香汗薄衫涼。涼衫薄汗香。／手紅冰
腕藕。藕腕冰紅手。郎笑藕絲長。長絲藕笑郎。

【大意】ヤナギの植えられた庭に吹く風も止み、人は晝寝をしている。晝寝をして人は静かに、庭のヤナギに風が吹く。香る汗、薄いシャツは涼しく、風通しのいいシャツに、薄っすらと汗が滲み香る。／赤く豔のある手で氷を混ぜたハスの盛られた腕を持ち、ハスの入った腕は赤く豔のある手を冷やす。男はハスの絲が長いことを笑い、女は長い絲を引くハスを食べながら男を見て微笑む。

本詞は、元豐三年（一〇八〇年）冬、黃州で作られたもので、讀んで分かる通り、回文を使った諧謔の作品である。蘇軾は夏のイメージを、ヤナギを用いて描く。夏の晝下がり、人は晝寝をして、邊りは静まっている。ヤナギは葉を茂らせ、風に揺れている。諧謔の作品で、詞の後半は分かりづらいが、「藕」を「偶（伴侶）」に、「絲」を「思（愛情）」に掛けることで女の戀心を詠んでいる。

葉を十分に茂らせた庭のヤナギは、大きな日陰を作り、夏の暑い日差しを遮っている。それが静けさにもつながり、ヤナギを使い、夏の晝下がりの光景をうまく詠んでいる作品である。

「阮郎歸」

綠槐高柳咽新蟬。薰風初入弦。碧紗窗下水沈煙。棋聲驚晝眠。／微雨過、小荷翻。榴花開欲然。玉盆纖手弄清泉。瓊珠碎却圓。

【大意】緑のエンジュと高いヤナギに今年初めてのセミが鳴き、香しい夏風が初めて吹く。緑の網戸の下、沈水香がくゆる。碁を打つ音に晝寝から目覚める／小雨が降り過ぎ、小さなハスの葉が揺れる。ザクロの花は

咲いて燃えるように赤く、女は清らかな泉に生える丸いハスの葉を細い手で弄び、水滴はハスの葉の上で碎けては丸くなる。

本詞は、元豐七年（一〇八四年）四月、流刑地が黃州から汝州に變わり、その旅の途中の興國（湖北省陽新）で作られたものである。冒頭、セミの鳴く初夏の風景が描かれているが、これは、西晉・潘岳の「擬明月何皎皎詩」の「涼風が奥まった部屋に吹き渡り、秋のセミが高いヤナギの木で鳴く（涼風繞曲房、寒蟬鳴高柳）」を踏まえる。中國文學では、セミは秋をイメージするが、蘇軾はここで、わざわざ潘岳の詩の「寒蟬」を「新蟬」に變え、「薰風（初夏に吹く東南の風）」の語を用い、初夏の作品に仕立て直している。「咽」の字からは、まだ鳴き始めたばかりで、うまく鳴けない様子が伝わってくる。また、碁を打つ音に晝寝から覚めるといふ表現からは、静けさが伝わってくる。先の「菩薩蠻」詞と同様に、葉を茂らせたヤナギの高木の描寫を使い、静かな夏の晝下がりの様子を巧みに描いている。また、そこに風が吹くことで、涼感を加えているのも、共通していると言える。

次に、冬のヤナギを詠んだ作品を見てみる。

「浣溪沙」

細雨斜風作小寒。淡煙疏柳媚晴灘。入淮清洛漸漫漫。／雪沫乳花浮午盞、蓼茸蒿筍試春盤。人間有味是清歡。

【大意】小雨が降り、風が斜めに吹き、少し寒い。薄い霧が葉の疎らのヤナギに掛かり、晴れた早瀬と映え合って美しい。淮水に流れ込む澄んだ洛水は徐々に水量を増してゆく。／眞つ白な泡が湯飲みに浮かび、蓼、茸、蒿、筍を盆に載せ春の美味を晝下がりに味わう。この世の中で味わい深いのは、この清らかな喜びである。

本詞には、「元豐七年十二月二十四日、泗州の劉倩叔氏に従って南山に遊んだ（元豐七年十二月二十四日、從泗州劉倩叔游南山）」という序が付いており、詞の冒頭三句は、泗州（江蘇省淮安市盱眙）の南にある都梁山（南山）の年末の風景を詠んでいる。薄い霧の掛かる「疏柳（葉が疎らなヤナギ）」は、春の芽吹き始めた黄金のヤナギ、夏のこんもりと葉を茂らせたヤナギと比べれば、見榮えは當然劣る。しかし、蘇軾はそこに美を見出す。本詞の最後には「清歡」とあり、ヤナギは「晴灘」、「清洛」と呼應し、質朴で飾り氣のない「美」の景物として描かれている。

蘇軾の詞に見えるヤナギは、もちろん、その多くが春の美しい景色の描寫である。しかし、彩りを缺く景色としてのヤナギ、葉を茂らせ大きな日陰を作る夏のヤナギ、葉を落としながらも雨上がりの川瀬と映え合う冬のヤナギも、詞に詠まれている。そこには、様々なヤナギの姿を無理無く自然に描く、蘇軾の筆遣いの妙が見て取れるのではないか。

四 結びにかえて

官僚にとって轉勤は避けることのできない。熙寧七年（一〇七四年）十二月、密州知事に着任した蘇軾は、二年後の熙寧九年冬、河中府知事に移る告が下り、密州を離れることになった。蘇軾は離任の間に「江城子」詞を作り、同僚への別れの言葉を綴っているが、そこにヤナギが詠まれている。

「江城子」

前瞻馬耳九仙山。碧連天、晚雲間。城上高臺、眞個是超然。莫使恩恩雲雨散、今夜裏、月嬋娟。／小溪鷗鷺靜聯拳。去翩翩。點輕煙。人事淒涼、回首便他年。莫忘使君歌笑處、垂柳下、矮槐前。

蘇軾の詞に見られるヤナギについて

【大意】前に馬耳山と九仙山を見る。緑の峰は天の夕暮れ雲の邊りまで連なる。城壁の上の高臺は、文字通りの「超然」である。慌ただしく酒宴をおひらきにはいけない。今夜は、月が美しく射しているから。／小川にカモメとサギが静かに並び、飛び立って霧の中に点となり去って行く。この世の事は荒涼として、振り返れば一年などすぐに経ってしまふ。だから、密州知事の私が（今までこの地で）歌い笑った所、枝垂れヤナギの下、低いエンジュの木の前を忘れないでいてくれ。

本詞は、超然臺で作られたものである。²⁷ 超然臺は、官舎の庭の北側にあった古い臺を改修したもので、蘇軾は、清風明月の夜は、必ずそこで過ごした。²⁸ この日も、月が美しく、蘇軾は友人と共に超然臺に上り、酒を酌み交わしていた。ただ、この日の酒宴は、蘇軾の送別の會であった。「小川にカモメとサギが静かに並び、飛び立って霧の中に点となり去って行く」は、蘇軾の旅立ちを暗示している。²⁹ そこで、「慌ただしく酒宴をおひらきにはいけない」と言い、名残りを惜しむ。「どこに行こうとも必ずそこで楽しみを見つけ」、「世俗の外で遊ぶ」蘇軾であっても、別れはやはり辛い。同僚に「私はこのたび、密州を離れることになった。私がこの密州で歌い笑った枝垂れヤナギの下、低いエンジュの木の前を忘れないでほしい」と言う。「枝垂れヤナギの下、低いエンジュの前」とは、同僚と心を解き放ち伸び伸びと過ごした蘇軾のお氣に入りの場所である。³⁰

密州において、歌を歌い談笑する場所には、ヤナギがあった。いやむしろ、ヤナギがある場所を選んで、心樂しく過ごしたのである。蘇軾はもう一首、超然臺で作った詞がある。「超然臺での作」という小序が付けた「望江南」詞であるが、その冒頭に「春はまだ盛りが續き、風はそよそよと吹きヤナギが揺れる。そこで超然臺に上り春景色を眺めてみ

た（春未老、風細柳斜斜。試上超然臺上看）」とあり、風にそよぐヤナギに觸發され超然臺に上ったことが書かれている。蘇軾にとつて、心を解き放ち、作詞を觸發してくれるもの、それがヤナギであった。

熙寧十年三月、都に入城を許されなかつた時、理解者のいない自己をヤナギに投影して詠じ、また、元豐四年春、黃州の地で、散り落ちるのを惜しむ人もいなく、土くれとなり、川の流れに消える柳絮に、流人の自分を重ねた。これは、目の前のヤナギに觸發され、自分の不遇を詠じたものである。また、蘇軾は黃州で、雪堂を建て、心の據り所とした時、ヤナギを植えて愛でた。それは、常に自分のそばにヤナギを置いておきたいという氣持ちからであろう。また、ヤナギは美しい春景色の象徴ではあるが、葉を茂らせ大きな日陰を作る夏のヤナギ、葉を落としながらも雨上がりの川瀬と映え合う冬のヤナギ等にも、美を見出し、詞に描いていく。蘇軾の詞に見られるヤナギからは、彼のヤナギへの深い愛情と常套にとられない自由な筆法がよく読み取れるのである。今後は、更に彼の詩に見られるヤナギに考察の範圍を廣げ、蘇軾のヤナギに對する愛情の源泉を辿つてみることにする。

【注】

- ① 本稿では植物の呼稱の場合「ヤナギ」と表記し、特に種子を言う場合「柳絮」と言う。
- ② 例えば、拙稿「庾信の「楊柳歌」について〜亡國とヤナギ〜」（『總合文化研究』第三卷二號、一九九七年）参照。
- ③ 試みに『蘇軾詞編年校注』に據つてヤナギの字（柳、楊、絮）が使われている作品を検索してみると、互見詞一首、存疑詞一首を除いて、五十首に使われている。
- ④ 章燦の「水龍吟」詞については、原文のみここに紹介する。「燕忙鶯懶花殘、正堤上、柳花飄墜。輕飛點畫青林、誰道全無才思。閑趁游絲、靜臨

深院、日長門閉。傍珠簾散漫、垂垂欲下、依前被、風扶起。蘭帳玉人睡覺、怪春衣、雪沾瓊綴。繡床旋滿、香球無數、才圓却碎。時見蜂兒、仰粘輕粉、魚吹池水。望章臺路杳、金鞍游蕩、有盈盈淚」（『全宋詞』〔中華書局、一九七七年〕第一冊二二三頁）。また、蘇詞と章詞との優劣については従来様々な議論があり、王水照氏の『蘇軾選集』（上海古籍出版社、一九八四年）三一二頁に詳しいが、小稿では論及しない。

⑤ 本詞の作成時期については、村上哲見氏の「水龍吟、次韻章質夫楊花詞」（『宋詞研究唐五代北宋篇』〔創文社、一九七六年〕所收）、邱俊鵬氏の「蘇軾《水龍吟・次韻章質夫楊花詞》瑣談」（『東坡詞論叢』〔四川人民出版社、一九八二年〕）等に編年考がある。

⑥ 『蘇軾文集』（中華書局、一九八六年）卷五十五「尺牘」所收「與章質夫三首」其の二に「柳花詞絕妙、…本不敢繼作、又思公正柳花飛時出巡按、坐想四子、閉門愁斷、故寫其意、次韻一首寄去、亦告不以示人也」とある（第四冊一六三八頁）。

⑦ 前⑤注の邱氏論文参照。

⑧ 「不恨此花飛盡、恨西園、落紅難綴」の解釋について、筆者は「落紅」を蘇軾に連座した蘇轍を詠んだと解釋する。蘇軾が湖州で逮捕された時、蘇轍は河南省商丘で南京留守簽判を務めていた。湖州からすれば、商丘は「西」に位置する。であれば「西の園で散り落ちた赤い花びら」は蘇轍を表していると解釋しても、無理はないであろう。

⑨ 『烏臺詩案』（『蘇軾資料彙編』〔中華書局、一九九四年〕上編二、五八七頁所收）参照。

⑩ 『蘇軾年譜』（中華書局、一九九八年）卷十六に「至陳橋驛、知徐州告下。時不得入國門、乃寓居城外范鎮東園」とある（上册三三二頁）。

⑪ 拙稿「蘇軾の超然臺の詩詞〜熙寧九年に起こった詩禍事件〜」（『日本中國學會報』五十一集、一九九九年）。

⑫ 本詞の制作時期については『蘇軾全集校注』に従う。なお『蘇軾詞編年校注』は蘇軾が惠州に流されていた紹聖二年春とする。その根拠は、『歷代詩餘』卷一一五に引く『冷齋夜話』に、惠州の地で妾の朝雲が毎日、本詞を歌い涙を流した、という記載である（薛瑞生『東坡詞編年箋註』〔三秦出版社、一九九八年〕も同じ）。ただ、この記載は「毎日歌った」とい

うものであり、作ったことを証明するものではない。よって『蘇軾詞編年校注』の編年には従わない。

- ⑬ 『蘇軾全集校注』「詞集」の本詞に關する「校注」参照。
- ⑭ 前注⑫の『冷齋夜話』の記載参照。
- ⑮ 「仍把紫菊紅萸」の句、『蘇軾詞編年校注』は「仍把紫菊茱萸」に作る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。
- ⑯ 徐君猷については、拙稿「蘇軾の徐君猷（大受）に關する詞と詩について」（『風絮』四號、二〇〇八年）参照。
- ⑰ 『蘇軾詩集合集』（上海古籍出版社、二〇〇一年）卷二十二、第三册 一一二九頁参照。
- ⑱ 「待閑看秋風、洛水清波」の句、『蘇軾詞編年校注』は「待閑看、秋風洛水清波」と區切る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。
- ⑲ 「仲卿終不忘桐鄉」の句、『蘇軾詞編年校注』は「仲卿終不避桐鄉」に作る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。
- ⑳ 本詞の「長記鳴琴子賤堂」は、春秋時代の宓子賤の故事を踏まえる。彼は役所の廣間で琴を弾いているだけで、單父の地を治めたという。また、「仲卿終不忘桐鄉」は、前漢の朱邑の故事を踏まえる。彼は若い時、桐鄉の下級官吏になり、その後、都に昇り出世したが、臨終に「私はもともと桐鄉の小役人であり、民は私のことを愛してくれた。死後は桐鄉に葬ってほしい」と遺言した。彼は死後、桐鄉の西に葬られたが、民はそこに祠を建て毎年祭りを行ったという。ここでは、この二つの故事を使い「陳」が有能で、民に愛された役人であることを稱えている。
- ㉑ 「手紅冰腕藕。藕腕冰紅手」の句、『蘇軾詞編年校注』は「手紅冰腕藕。藕腕冰紅手」に作る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。
- ㉒ 本詞の作成時期及び作成の動機については、村上哲見氏の「菩薩蠻、回文四時閨怨四首」（『宋詞研究唐五代北宋篇』所收）参照。
- ㉓ 「碧紗窗下水沈煙」の句、『蘇軾詞編年校注』は「碧綠窗下水沈煙」に作

る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。

- ㉔ 「細雨斜風作小寒」の句、『蘇軾詞編年校注』は「細雨斜風作曉寒」に作る。ここでは、『蘇軾全集校注』「詞集」に従う。
- ㉕ 劉倩叔（生卒年未詳）という人物、よく分からない。
- ㉖ 本詞の編年に關して『蘇軾詞編年校注』は、『蘇文忠公詩編注集成總案』卷十四（巴蜀書社、一九八五年）に従い、十月の作とする。一方、『蘇軾年譜』は、本詞中の「去翩翩。點輕煙」が離任を表現したものと解し、作詞時、蘇軾は轉任の知らせを受けた後と考え、十一月過ぎ、密州離任間際の作とする。筆者は詞の最後の「人事淒涼、回首便他年。莫忘使君歌笑處、垂柳下、矮槐前」からみて、蘇軾はこの時既に轉任の知らせを受けていたと考える。であれば、制作時期は、十一月過ぎの密州離任間際と考えるのが穩當であろう。
- ㉗ 『蘇文忠公詩編注集成總案』に「夜、超然臺に上り月を眺めて『江神子』詞を作った（晚登超然臺望月作江神子詞）」とある。
- ㉘ 蘇軾の「超然臺記」参照。
- ㉙ 『蘇軾年譜』卷十五、上册三四〇頁参照。
- ㉚ 「超然臺記」参照。
- ㉛ この詞は超然臺で作られ、内容から見て離任間際の作と見做される。であれば、同僚に對して「忘れずにいてほしい私が歌い笑った所」というのは、超然臺と解釋するのが穩當である。但し、「枝垂れヤナギの下、低いエンジュの木の前」という表現は、城壁の上に築いた臺の周圍の描寫とは解釋しづらい。そこでここは、小稿では文字通りの解釋に止めて置く。
- 〔付記〕 本稿は平成二十九年度日本大学商学部研究費の研究成果の一部である。

（日本大学商学部教授）